# 平成27年度欧州インフラ事情調査報告

株式会社新日本コンサルタント
設計計画本部　水環境部
流域保全グループ
升方 祐輔
MASUKATA Yusuke

## はじめに

今回の欧州インフラ事情調査への参加のきっかけを得た「平成26年度建設コンサルタント業務・研究発表会」において、私は、弊社が取り組む「砂防堰堤を活用した小水力発電事業への民間事業者としての取り組み」と題して発表し、幸運にも最優秀賞を賜ることができました。その副賞で「平成27年度WAVE・JCCA欧州インフラ事情調査」への参加の機会を得て、今回の調査団の一員に加わることができました。

それまで、公私ともにヨーロッパ渡航など想像もしていなかった私にとって、10泊12日の行程におよぶ欧州インフラ事情調査への参加は、人生かつてない貴重な三次元的空間体感を得るものとなりました。

## 視察の概要

今回の視察は、平成27年5月31日から6月10日の11日間で、フランス・ベルギー・オランダ・ドイツの主要4ヶ国の各都市を北上ルートで巡るインフラ事情調査であった。本稿では、各国の各主要都市で、私が特に印象に残ったトピックスを紹介させていただきたいと思う。

### (1) 港湾と都市（フランス：ル・アーブル）

5/31パリ・シャルル・ド・ゴール空港に降り立った調査団一行は、花の都パリには目もくれず専用バスにてセーヌ川右岸河口に位置する港湾都市ル・アーブルへ向かいました。翌6/1、ル・アーブル港湾局への公式訪問を行い、ル・アーブル港が取り組む開発プロジェクト（Port2000・HAPORA2030）と広域的な開発計画に伴う環境側面からのエリアマネージメントについて、熱心なプレゼンテーションを受け視察初日から世界を肌で感じることができた。

ル・アーブル港は、地理的にセーヌ川河口かつ英仏海峡の西側に位置し、西ヨーロッパの玄関として優れたアクセスを誇る最大級の港湾として、中世からその重要な役割を果たしている。しかしながら、変貌する世界貿易の中で、欧州のみならず米国・アジアを結ぶ国際海上輸送の要として、ヨーロッパ諸港との熾烈な競争の中で、戦略強化を図り、物流拠点としての港湾運営を行っていく必要があるのだと感じた。

また、ル・アーブルには作家アンドレ・マルローが創設したマルロー美術館があり、印象派の画家が描いたフランス絵画が数多く展示されている。絵画からは、中世からの港の様子、人々の生活の様子が伺い知ることができ、港を通じて発展してきた都市の歴史と当時の文化を感ずることができた。

写真1　発展を続けるル・アーブル港

写真2　印象絵画が展示されるマルロー美術館

写真3　運河から望む歴史都市ブルージュ・鐘楼

写真4　アイセル湖大堤防：左が北海側、右がアイセル湖側

### (2) 都市と運河（ベルギー：ブルージュ）

6/2夜半ベルギーに入国した一行は、翌6/3ゲント市内視察の後、中世の町並みが残るブルージュ旧市街視察を行った。ブルージュは9世紀の城塞が起源とされ、歴史的建造物と中世ヨーロッパのかわいらしい町並み「ブルージュ歴史地区」が世界遺産となっている都市である。ブルージュの旧市街は、市民が集う市場の開始時刻を告げる鐘楼を中心とした街づくりが行われ、またその市街には運河が張り巡らされることで、水辺に映える歴史都市として印象に残るメルヘン都市であった。ブルージュに限ったことではないが、欧州各都市において、運河・水路網を多様に活用し、水辺と融合した空間形成を図ることで、背後の土地・建物が映え、またそこに集う人々によって街が活気づいていることが印象的であった。

### (3) 都市と防災（オランダ：アイセル湖大堤防）

6/5オランダ　アムステルダムを出発した一行は、オランダ北西部に位置するアイセル湖大堤防を視察した。全長約30kmにおよぶこの大堤防は、1932年にそれまで湾だったゾイデル海を締め切る堤防として建設された。この大堤防が完成する以前は、北海の暴風がゾイデル海の海岸に甚大な洪水被害を及ぼしていたが、堤防完成後は、北部海岸の洪水を防止する役割以外に、干拓による農地確保、淡水湖による貯水池の確保が図られている。

この大堤防の天端は、片側二車線、計四車線の自動車専用道路となっており、海を渡る横断道路として大スケールの景観も大きな見所であった。

また、大堤防の海中工事では、粗朶沈床が150万$m^2$も利用されているとのことで、三国港突堤や常願寺川など北陸の河川でも縁のあるオランダ人の土木技師デ・レーケの土木技術が活かされている堤防なのだと肌で感ずることができた。

## おわりに

訪問先の欧州各都市は、それぞれの歴史と文化を背景に、都市の地形的特徴に応じた都市・河川・港湾の整備が行われていました。また、それを利用する人と物流が都市を育み、歴史的でメルヘンな都市から近代的な都市まで、街の表情に様々な特徴をもっていたことが印象的でした。日本国内のインフラ整備を担うコンサルタントとして、今回得た五感を大切にし、普段の業務で、すこしでも役にたてたいと思うところです。

また、欧州視察からの余韻が残る岐路（羽田発小松空港便）につく機上から、東京湾の埠頭と河口を囲む整然とした密集都市、活動を続ける美しい富士山、急峻な飛騨山脈を越えた後の蛇行河川と扇状地形、夕日の沈む九頭竜川河口の三国港突堤や石川海岸を眺めた時に、欧州と異なる日本の地形的特徴と国土のインフラ形成のあり方について再認識することができた。

最後に、各訪問地にまつわる歴史と文化、生活様式など貴重なお話を随所にご紹介いただいた中村先生をはじめ、JTBの高橋さん、各訪問地でのガイドの方々に心から深く感謝いたします。また、JCCA、WAVEの団員の皆様と貴重な空間・時間共有を図れたことに、参加者皆様に大変、感謝いたします。

写真5　岐路の機上から三国港突堤を望む